

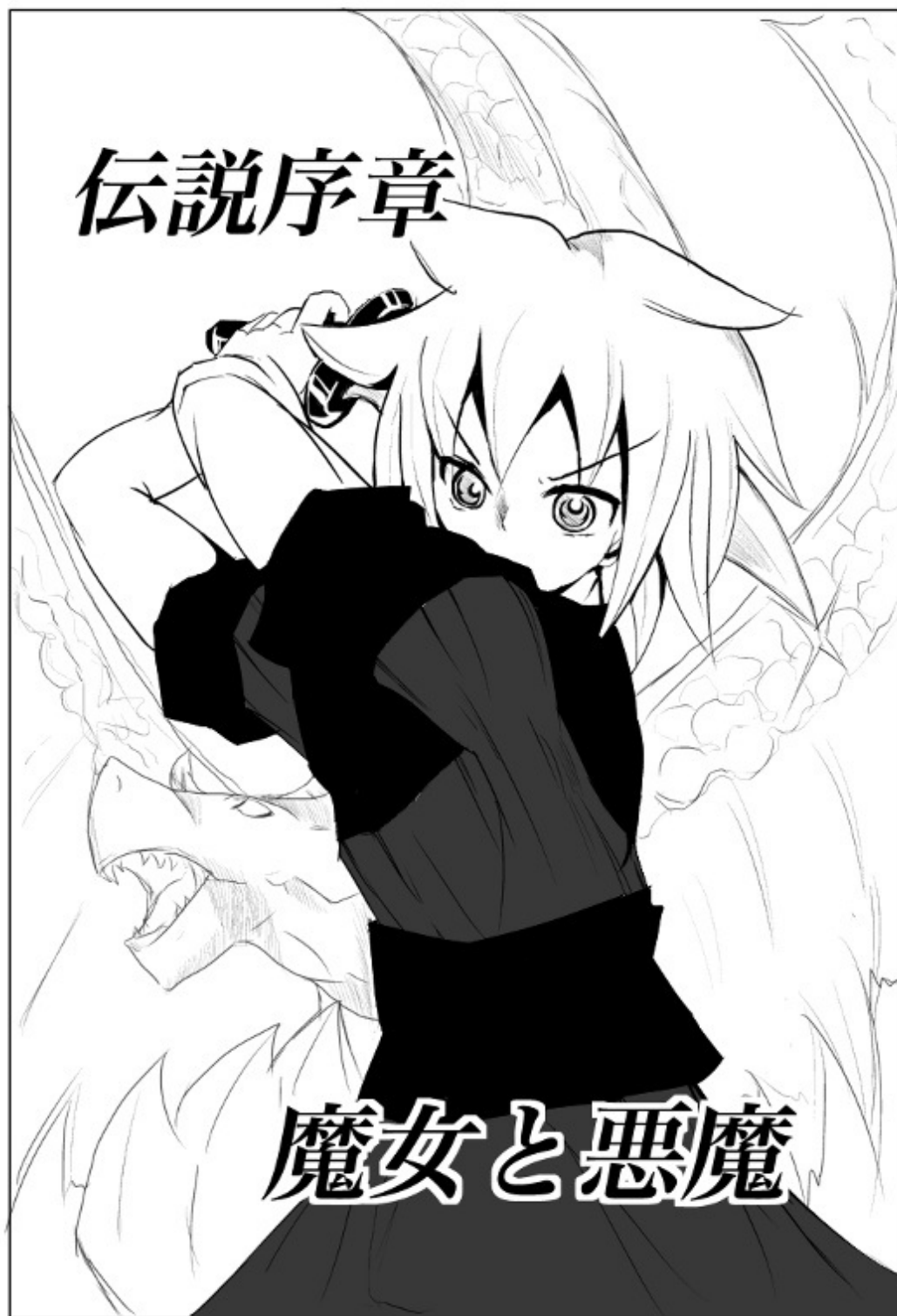


レジェンド オブ ワールド

LEGEND of WORLD

The story of the encounter

伝説序章



魔女と悪魔

見るにも美しい女は、実はメイガスだった。

メイガスとは、この世に存在すると言われる「奇妙な力」を操る事によって人並みはずれた力を使う事ができる人の事。

だけれどこの魔術師によると、その「奇妙な力」とはかつてソロモン王に従っていた魔人とその精霊らしい。。

「今ここに集まっているエネルギーは我々魔術師にとって愛おしき存在によってもたらされているのよ!! ただの人間などという下衆なものにはわからない神秘の力!!」

魔女はその杖に宿した見るにも恐ろしい紅の球を辺りに思うがままに降らせた。その光景まさに地獄絵図。ある者は攻撃をまともに受け、ある者は避けきれなく肌が焼けこげて・・・。そんなことで、王の廷臣や駆けつけた庭番など多くの者達が犠牲となった。部隊の大半も崩壊しており、中にはもう逃げ出している者の姿も見えた。それでもお前達は王に仕える役人なのか。と声をはろうともできない状況なのはガウエインでさえも分かっていた。

「どうやら見たところ貴様は薄汚い魔法使いなようだな。この王宮にも以前魔術師がいたが、やつはとても正義感に満ちた立派な奴だったぞ。」

「知ってるわよ!! だって彼は私に恋して私の手によってこの大地に封印されてしまった愚か者だからね!!」

「なに?」

驚きの色を隠せない人々をよそに、魔女はまたもや杖を振るう。だけれど、なんだか様子がおかしい。

安定しなく荒々しいものの、魔法の力はさっきよりも大きいのは確かなのに。

「いまましい。この王宮が、いえ、何もかもが忌々しい!!!」

さきほどから居眠りをしている者が一人。彼は魔術師の話を耳にすると、あるなつかしい夢を見た……。

昔から親しくしてくれていた年寄りが一人。自分の側にいつもいる。彼は毎日面白い話をしてくれていた。遠く、まだ誰も足を踏み入れた事のない大陸のお話。世にも奇妙な三種の珍品の話。時には、未来の出来事まで語ってくれたっけ。ああ、どれもこれも懐かしいと思っていると、それはついにアヴァロンの湖に……最後の地。

「お前はいつか王になるが、その前に大きな災厄がこの都に訪れるだろう。

だか、お前を導いてくれる者が必ず、きっと現れるだろう。さあ。何も心配する事はない。お前ならきっと……私は……ずっとお前の側にいる。」

この言葉が彼との最後の会話であったためか、暖かい、いつまでもあってほしいその夢はついに覚めてしまった。

思わず涙が少年の二つの深い谷からこぼれ落ちる。熱い二つの谷から。その熱さは周りを取り巻いている魔法の炎よりも何倍も熱い。

「お前が……」



もう!
あの人ったら私よりも
この王宮のほうが...
知ってるわよ!
私があの人を
大地に封印したんですもの!

ああ!
忌々しい!

何もかもが
忌々しいのよ!

未来の王よ 剣をとれ



私はずっと
お前の側にいる



アーサー

いずれお前の周りに
災厄が訪れるだろう...
だが、心配する事は無いよ



畜生!
お前があゝ!



お前が、
お前がおじ様を!
あの時僕が、
もつと大人だったら!

貴様との縁なんか
断ち切ってたのに!

魔女がチラリと下を見ると、いつの間にか少年が真下に。

「お前、いつから居たんだい？ 私の目にはただの死人としか見えてなかったのにねえ。だからさ、お前、急に喋りだすもんだからこっちも少々驚いちまったよ。」

「うるさい。お前が、おじ様を……。僕は知っていたさ。もちろん聴いていたからね。だけどそんなおじ様の作り話だと思っていた。だけど5年ほど前に別れてからというもの、あの時にまた戻りたいといつも思うようになったさ。そして、そんな女なんかとは縁を切ってほしいって頼みたかった!!!」

アーサーはふいに剣を彩りの良い鞘から抜き出すと、魔女に飛びかかた。魔女も黙って見ているほど馬鹿ではない。すかさず杖で抵抗する。

アーサーは王宮で様々な剣術を学び、その中で出会ったブロードソードは良く手になじんでいて素早い動きをもたらした。

あまりの素早さに流石の魔女も直ぐさま距離をおく。

「その剣術はたぶんキャメロットの伝統だと思うが、それにしては何か違う」

先ほどとはマメと牛ほどの違いとでもいってもいいような、煮え立つ紅の魔弾を作り出すと、アーサーめがけてふるい落とした。

「ちょっとだけ見直したわ坊や。 だけど、もうおしまいね!」

これにはアーサーもお手上げ。無様にも喰らってしまった。

さあこれには王は仰天。すっかり意識を失ってしまう程の始末。まだ生き残っていた周囲の者達は大いに嘆き悲しんだ。これからを担う我が王子がこうも無残に殺されてしまっては、黙っている者などいるはずもない。テラスからこの光景を魔女にバレないように見ていたドロシーは、

「何なのよあれ……。アーサー!!」

どこから沸き上がってくるのだろうか、そんな勇気を振り絞って、いつの間にか、彼女はアーサーめがけて走った。魔女の横を通り過ぎるのもおかまい無し。何にも恐れずに走った。さあ大変。女性、しかもまだ若い娘が戦場に躍り出てきてしまったので、

「おおい!! そこの若い娘よ!! まだこんな所にいたのかい!? ここはとても危険だから、すぐにでもこの宮殿から出るんだ!!」

ランスロットが出来るかぎり説得をしたが、ドロシーは一向に退く気はなかった。

それどころか、アーサーの所にたどり着くや否や剣を掴んだ!

周りの人は、彼女は気でも狂ってしまったのか?と疑ったが、そんな事はすぐに馬鹿な考えになった。というのも、

『汚らわしい魔女よ……』

「なに、何か用? お前のような小娘が出る幕ではないのよ?とっとと消えてもらいましょうか。」

『お前ごときに殺されるなんてわたしも見くびられたものだな。』

「何を言っているのか……」

魔女が台詞を言い終わる間もなく、一筋の風がドロシーを取り巻き始めた。澄みわたった、見る者の心を励ますようなエメラルド色の風。

その風は一陣の渦を巻くやいなや、巨人へと姿を変えていた。

『我が名はフォカロール。ソロモン王によって封印されし魔人である。西の魔女・エルファバよ。そなたの心意気にはある意味感心したぞ。』

「あっあなたは、まさかこんな所でお目にかかれるとわあ〜♡ あなた様のお言葉、誠にこの上ない限りです!」

『元々私も一種の悪魔だったからね。』

『だか、なにも褒めにきたわけでわない。わたしは、この娘によって呼び出されたまでよ。いかにして、わが姫、何なりと願いをお申し付けください。』

「なんだと? そんなまだまだ初な娘が偉大な魔人を呼び出しただと!? これはまた、いまましい。」

『ふふっ、これはいけない! 姫は私をお呼びになりはしたものの”気”が抜けておられている!! それではわたしは何も出来まいの。』

(これはしめた。今のうちにこの魔人の器である奴を軽々殺す事が出来る。)

卑怯なエルファバは、杖の尾にある尖った突起で、ドロシーを殺してしまおうとした。が、杖が持ち上がらない!

というのも、目の前の珍しい出来事に集中しすぎていて、自らの周囲を気にしていなかった隙にランスロットとガウエインが後ろを取っていたのだ。

ランスロットとガウエインは魔人が出てきた時こそそれは吃驚驚きはしたが、エルファバにできた隙を見逃す事はなかった。

「ようやく、ケリがつけられるな。」

「お前が魔女でなくただの貴婦人だったら、俺の好みだったのによ」

ランスロット・ガウエインがそれぞれもの言うと、魔女に対して終止符をうった。

魔女は魔女でも、体はただの人同然なのは当たり前……のはず。

『おやおや、私が出てきてもあまり意味はなかったみたいね。姫、貴方からは何か懐かしいものを感じました。せつかく呼びだされた事だし・・・』

魔人はまた一陣の渦を巻いてアーサーのブロードソードに吸い込まれていった。

その時の様子は、風がかすかに揺れ動いたようにしか普通の人々には感じられなかったようだ。

それから、数時間がすぎ、まず始めにドロシーが目を覚ました。

ドロシーは事の騒ぎが集結しているのを知ると、とても安心した。

テラスから自ら走り出た時の記憶は一切なかったらしく、アーサーが死んでしまった事もすっかり知らなかったので、

「魔女はあのあとアーサーがお倒しになったんですよね？」

っと、何のためらいもなくいつてしまった。

周りの人々の表情が一気にこわばってしまったので、とっさにランスロットが事の一切を話してあげた。

「そんな・・・」

ドロシーは、初めてこの世界であった青年がその日のうちに死んでしまうなんて、希望の光が一瞬にして消えてしまったなんて、と、狂ったような感情に包み込まれてしまった。

宮殿中、皆、悲しみにふけていると、何やら陽気な声が聞こえてきました。そう。グウェネビア姫。

「もう皆さん。なにをそんなに悲しんでおられるのよ？ 変な人はもう殺っちゃったんでしょ?? それにアーサー、さっき私に腹を落とされてからいつまで寝てんのよ！ もう、アンタが寝ている間にとっても大変な出来事が起こったのよ！」 「ただ、それも勇敢な人々のおかげでけりがついたみたいですけどね。」

グウェンがこう言っている姿をみていると、ますます周りの人々は悲しくなるばかり。しかし、どうした事か。アーサーが寝ている方向からうめき声が聞こえる……。また、グウェンがアーサーをひとたび蹴ると、

「うう……。いったいなあ!! こんな事するなんてグウェンしかいない!!」

ひょいっと、それまで死んでいる者だと思われていたアーサーが陰気な声を上げて起き上がった。

この現象は彩りの良い鞘に秘密があるらしいが、それはまた別の機会に……。よって、アーサーは鞘の力に助けられ、ただ死んでいたようになっていたのは、気を失っただけだったのだ。

その日の祝宴は台無しになってしまったが、アーサーの無事と、迷い込んだお嬢さんによって今回の危機をなんとか治める事が出来た事はキャメロットの民衆にとっては祝宴以上の賑わいの元になった。そして、その日から盛大なお祭りが行われ、キャメロットの人々は活気を取り戻そうと皆で努力しはじめた。

LEGEND of WORLD ～the story of the encounter～ prologue 3

<http://p.booklog.jp/book/38390>

著者 : livesonic

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/livesonic/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/38390>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/38390>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.